

元曉『法華宗要』 訳注(4)

金 炳 坤

一、序 言

筆者はこれまで、海東における現存する最古の法華章疏である、元曉撰『法華宗要』の構成にしたがって、次の三編の論考を記し、「元曉『法華宗要』 訳注(1)」（『大学院年報』第二八号、二〇一一年）、「同(2)」（『仏教学論集』第二八号、二〇一一年）、「同(3)」（『大崎学報』第一六八号、二〇一二年）のそれぞれにおいて「初述大意」、「第二弁經宗」、「第三明能詮用」の訳注を行うとともに、かかる諸問題、すなわち本書の構成（「六消文義」は撰述していないこと）、著述動機（その一つに五姓各別説に対する批判の意が込められていること）、著述年時（六六八年を基点とする前・後二期成立説の提示）、元曉著述の編年史、そして本書の日本仏教における受容と展開（一乗思想の論拠としてとりわけ華嚴宗章疏^{（註）}においてのみ用いられていること）について論究してきた。

これらの続編となる本稿では、元曉の『妙法蓮華經』に対する経題（妙法・蓮花^{（註）}）^{（註）}が示されている「第四釋題名」の訳注を行い、同じく経題釈が示されている「初述大意」とも併せて考察することによって、元曉の経題釈の特質と、そのなかでの古藏造『法華遊意』の役割や位置付けについて論じることとする。

「第四釋題名」の科段分けは次のとおりである。

〔科段〕

4. 第四釈題名

4-1. 妙法の四義

4-1-1. 巧妙の四義

4-1-2. 勝妙の四義

4-1-3. 微妙の四義

4-1-4. 絶妙の四義

4-1-5. 十六種の極妙の義

4-2. 蓮花の喩

4-2-1. 通

4-2-2. 別 (蓮花の四義)

4-2-2-1. 蓮花の四種中分陀利 (巧妙)

4-2-2-2. 蓮花の三名 (時) 中分陀利 (勝妙)

4-2-2-3. 蓮花 (微妙)

4-2-2-4. 蓮花 (絶妙)

〔典拠〕

『妙法蓮華經』〔法師品〕

『妙法蓮華經』〔如來神力品〕

『妙法蓮華經』〔譬喩品〕

『妙法蓮華經』〔方便品〕

『法華遊意』 (一部援用)

『法華遊意』 (一部引用)

『法華遊意』 (一部引用)

『法華遊意』 (一部援用)

なお、訳注の凡例は前掲の先行論考を参照されたい。

二、「第四釋題名」の訳注

4. 第四釈題名、4-1. 妙法の四義(巧・勝・微・絶)

〔原文〕〔NNJ〕p.35. //261-263・T.34 p.874a. //13-16・HBZ.1 p.492b. //17-20)

第四釋題名者。具存梵音。應云薩達摩分陁利修多羅⁽²⁾。此云妙法蓮華經。言妙法者。略有四義。一者巧妙。二者勝妙。三者微妙。四者絶妙。

〔訓読文〕

第四に題名を釋すとは、具さに梵音を存す。應に「薩達摩分陁利修多羅」と云うべし。此に『妙法蓮華經』と云う。妙法と言うは、略して四義有り。一には巧妙。二には勝妙。三には微妙。四には絶妙なり。

4-1-1. 巧妙の四義(開・滅・示・生)開權顯実

〔原文〕〔NNJ〕pp.35-36. //263-265・T.34 p.874a. //16-19・HBZ.1 p.492b. //20-23)

言巧妙者。此經巧開方便之門。巧滅執三之見。巧示真實之相。巧生已一之惠。以是四義。而作真軌。故言妙法。

〔訓読文〕

巧妙と言うは、此の『妙法蓮華經』は、巧みに方便の門を開き、巧みに三に執するの見を滅し、巧みに真實の相を示し、巧みに已に一なるの恵を生ず。是の四義を以て、而して真軌と作す。故に妙法と言う。

4-1-2. 勝妙の四義 (宣・示・顕・説) 宣示顕説

〔原文〕 (NNJ. p.36. //265-270・T.34 p.874a. //1.19-24・HBZ.1 p.492b. l.23 - p.492c. l.5)

言勝妙者。此經能宣一切佛法。能示一切神力。能顯一切祕藏。能説一切深事。以此四義。最為勝妙。故名妙法。如神力品云。⁽³⁾以要言之。如來一切所有之法。如來一切自在神力。如來一切祕密之藏。⁽⁴⁾如來一切甚深之事。皆於此經宣示⁽⁵⁾示顕説。故言妙法。

〔訓読文〕

勝妙と言うは、此の『妙法蓮華』經は、能く一切の佛法を宣し、能く一切の神力を示し、能く一切の祕藏を顕わし、能く一切の深事を説く。此の四義を以て、最も勝妙と為す。故に妙法と名づく。『妙法蓮華經』「如來」神力品に云うが如し、「要⁽³⁾を以て之を言わば、如來の一切の所有の法、如來の一切の自在の神力、如來の一切の祕密の藏、如來の一切の甚深の事、皆な此の經に於いて、宣示顕説す」と。故に妙法と言う。

4-1-3. 微妙の四義 (一乗の果、円・淨・窮・度) 衆徳円満

〔原文〕 (NNJ. pp.36-37. //270-274・T.34 p.874a. //2.24-29・HBZ.1 p.492c. //6-10)

言微妙者。此經所説一乗之果。无妙徳而不圓。无雜染而不淨。无義理而不窮。无世間而不度。以是四義。故名微妙之法。如譬喻品云。⁽⁷⁾是乘微妙。清淨第一。⁽⁸⁾出諸世間。為无有上。故言妙法。

〔訓読文〕

微妙と言うは、此の『妙法蓮華』經の所説の一乗の果は、妙徳にして圓かならざること無く、雜染にして淨らかな

らざるること無く、義理にして窮まらざるること無く、世間にして度せざるること無し。是の四義を以ての故に微妙の法と名づく。『妙法蓮華經』「譬喻品」に云うが如し、「是の乘は微妙にして、清淨第一なり。諸の世間を出でて、さだ為めて上有ること無し」と。故に妙法と云う。

4-1-4. 絶妙の四義（一乘法の相、广大・甚深・離言・絶慮）

〔原文〕(NNJ. p.37. ll.274-277・T.34 p.874a. l.29 - p.874b. l.3・HBZ.1 p.492c. ll.10-14)

言絶妙者。此經所説一乘法相。廣大甚深離言絶慮。以是四義故。為絶妙之法。如方便品云。(9)是法不可示。言辭相寂滅。諸餘衆生類。无有能得解故。

〔訓読文〕

絶妙と云うは、此の『妙法蓮華經』の所説の一乘法の相は、廣大、甚深にして、言を離れ、慮を絶す。是の四義を以ての故に絶妙の法と為す。『妙法蓮華經』「方便品」に云うが如し、「是の法は示す可からず、言辭の相寂滅せり。諸餘の衆生の類は、能く得解すること有ること无き」が故にと。

4-1-5. 十六種の極妙の義（妙法の名の略釈）

〔原文〕(NNJ. p.37. ll.277-280・T.34 p.874b. ll.37・HBZ.1 p.492c. ll.14-19)

此四義中。巧妙勝一妙之法。當能詮用立名。微妙絶妙之義。從所詮宗作目。合而言之。具含如是巧勝微絶。十有六種極妙之義。十方三世无二之軌。以是義故。名為妙法。妙法之名。略釋如是。

〔訓読文〕

此の四義の中、巧妙・勝⁽¹⁾妙の法は、當に能詮の用にて名を立つべし。微妙・絶妙の義は、所詮の宗に従りて目を作す。合して之れを言わば、具さに是くの如き巧・勝・微・絶を含む。⁽¹⁾十有六種の極妙の義、十方三世无⁽²⁾二の軌なり。是の義を以ての故に、名づけて妙法と為す。妙法の名、略釋することは是くの如し。

4-2. 蓮花の喩(別・通)、4-2-1. 通

〔原文〕 (NNJ. pp.37-38, //280-282・T.34 p.874b, //7-10・HBZ.1 p.492c, //19-22)

⁽³⁾蓮花之喩。有別有通。通者。此華必具⁽⁴⁾華鬚臺實。四種合成殊為美妙。喩於此經。具四妙義。合成一經。故名妙法。

〔訓読文〕

蓮花の喩に、別有り、通有り。通とは、此の華、必ず華・鬚⁽⁵⁾・臺⁽⁶⁾・實を具す。四種合成して殊に美妙⁽⁷⁾為り。此の『妙法蓮華』經の、四妙の義を具して一經を合成するを喩う。故に妙法と名づく。

4-2-2. 別(蓮花の四義)、4-2-2-1. 蓮花の四種中分陀利(巧妙)

〔原文〕 (NNJ. p.38, //282-285・T.34 p.874b, //10-12・HBZ.1 p.492c, //22 - p.493a, //1)

別而言之。即有四義。一者。蓮花之類。有四種中。分陀利者。是白蓮花。鮮白分明。花開實顯。喩於此經。了了分明。開權顯實。之巧妙也。

〔訓誦文〕

別して之れを言わば、即ち四義有り。一には、蓮花の類に四種⁽¹⁹⁾有る中、分陁利とは、是れ白蓮花なり。鮮白分明にして、花開かば實顕⁽²⁰⁾わるるは、此の『妙法蓮華』經の、了了分明、開權顯實を喩う。之れ巧妙なり。

4-2-2-2. 蓮花の三名(時)中分陁利(勝妙)

〔原文〕(NNJ. p.38. //285-288・T.34 p.874b. //13-16・HBZ.1 p.493a. //1-5)

二者。此花凡有⁽²⁰⁾三名。未敷之時。名屈摩羅。將落之時。名迦摩羅。已敷未衰。處中之時。開榮勝盛。稱分陁利。喩於此經。大機正發之盛時。宣示顯說。之勝妙也。

〔訓誦文〕

二には、此の花に凡そ三名有り。未だ敷かざるの時を屈摩羅 (kuṣmāla、蕾) と名づけ、將に落ちんとするの時を迦摩羅 (kamala、黄目) と名づけ、已に敷いて未だ衰えざる處中の時、開榮勝盛なるを分陁利と稱す。此の『妙法蓮華』經の、大機正しく發するの盛んなる時、宣示顯說するを喩う。之れ勝妙なり。

4-2-2-3. 蓮花(微妙)

〔原文〕(NNJ. pp.38-39. //288-290・T.34 p.874b. //16-19・HBZ.1 p.493a. //5-8)

三者。此花非直。⁽²¹⁾出離泥水。亦乃圓之香潔。衆美具足。喩於此經所說佛乘。一出煩惱濁離生死海衆徳圓滿。之微妙也。

〔訓読文〕

三には、此の花は、直ちに泥水を出離するに非ず。亦た乃ち圓かなるの香り潔く、衆美を具足す。此の『妙法蓮華』の所説の佛乗の、煩惱濁を一出でて、生死の海を離れ、衆徳圓滿なるを喩う。之れ微妙なり。

4-2-2-4. 蓮花(絶妙)

〔原文〕 (NNJ. p.39, I/290-293・T.34 p.874b, I/19-22・HBZ.1 p.493a, I/8-12)

四者。此花非直荷廣⁽²⁴⁾深⁽²⁵⁾。亦乃不着水滲不染塵垢。喩於此經所説一乘法門。廣大道理甚深。離言絶慮。之絶妙也。由是四義。有同妙法。故寄是喩。以立題名也。

〔訓読文〕

四には、此の花は、直ちに荷⁽²⁴⁾廣⁽²⁵⁾く、藕⁽²⁵⁾深⁽²⁵⁾きに非ず。亦た乃ち水滲に著⁽²⁵⁾かず、塵垢に染まらざるなり。此の『妙法蓮華』の所説の一乗の法門の、廣大、道理の甚深、離言、絶慮なるを喩う。之れ絶妙なり。是の四義に由りて、同じく妙法有り。故に、是の喩に寄せて以て、題名を立てるなり。

三、結語

以上、「第四釋題名」の訳注を終える。元曉は本經の經題たる妙法・蓮花を釈するにあたり、妙法と蓮花のそれぞれに、巧妙・勝妙・微妙・絶妙の四義があると規定し、さらにこの四義のそれぞれのなかにも四義があると定義している。彼はこれを「十六種の極妙の義」と解釈しており、この概念こそがほかの註釈家とは異なる、元曉の經題釈の特

質といえるものである。略記すれば、次のようになる。

妙法・蓮花 — 巧妙 (開・滅・示・生 || 開權顯実)

— 勝妙 (宣・示・顯・說 || 宣示顯說)

— 微妙 (二乗の果、円・淨・窮・度 || 衆徳円満)

— 絶妙 (二乗法の相、廣大・甚深・離言・絶慮)

ただ厳密に言えば、元曉は「第四釋題名」において、蓮花の喩を論ずるにあたり、吉藏の『法華遊意』の「三釋名題門」の「七釋名門」を引用・援用している。しかし、妙法・蓮花の四義の解釈に関しては、あくまでも元曉独自のものといえることができる。

しかしながら元曉は、「初述大意」における妙法の解釈に際しても、吉藏の『法華遊意』の「開題序」を引用・援用しているため、元曉の『法華宗要』における本經の經題(妙法・蓮花) 釈に対する主な典拠こそ吉藏の『法華遊意』にほかならないことが明らかとなるのである。

ことに元曉は「第四釋題名」において、巧・勝・微・絶という四つのタームを反復使用しているが、これは「初述大意」において示される次の論法

妙法・蓮花 — 文辭の巧妙 — 開權・示実

— 義理の深妙 — 無二・無別

とこれを構成する、文・辭・義・理という四つのタームが、反復使用されていることと揆を一にすることができよう。

『法華宗要』におけるこのような四つのタームの反復使用は、「初述大意」「第四釋題名」のみならず、「第二弁經宗」において示される一乗の四教（理・教・因・果）や、「第三明能詮用」において示される四種勝用（用三為一・將三致一・会三帰一・破三立一）からも見受けられるもので、これに彼の「四教判」（三乗別教・三乘通教・一乘分教・一乘滿教）までを含めて、これを用字法に長けていた元曉ならではの「文章作成のスタイル」（＝四つのタームの反復使用）として指摘することができよう。

註

(1) ただし、「訳注(3)」において指摘した五師五部のほかに、湛睿 (CE:1271:1346) 撰『五教章纂釋』からも、本書の引用〈壽靈 (CE:757:791) 述『華嚴五教章指事』からの孫引き〉が確認できたため、これを加えて六師六部に訂正しておきたい。引用文例は、福士慈稔著『日本華嚴宗にみられる海東仏教認識〈日本仏教各宗の新羅・高麗・李朝仏教認識に関する研究―第3巻〉』（身延山大学東アジア仏教研究室、二〇一三年）に詳し。

(2) 【薩達摩分陀利修多羅】 *Saddharma-pundarika-sutra* の音写語。この具名については以下のような解釈がなされている。法雲 (CE:467:529) 撰『法華義記』巻第一に「若具・存胡本應言薩達摩分陀利修多羅。外國云薩此方言妙。天竺云達摩此翻爲法。胡云分陀利此方言蓮花。外國云修多羅此方對經。今具存此土之音故言妙法蓮花經也。」【T:33 p.574 脚註①】「存＝在(㊸)」(T:33 no.1715 p.574a. 111-15) と、智顛 (CE:538:597) 說灌頂 (CE:561:632) 述『妙法蓮華經玄義』巻第八上に「第二釋通名者。經一字也。具存胡音。應云薩達摩分陀利脩多羅。薩達摩。此翻妙法。分陀利。此翻蓮華。已如上釋。脩多羅。或云脩婁蘭。或云脩妬路。彼方楚夏。此土翻譯不同。或言無翻。或言有翻。」(T:33 no.1716 p.775a. 115-9) と、古藏 (CE:549:623) 撰『法華玄論』巻第二に「第三釋名 具存梵本應云薩達摩分陀利修多羅。竺法護公翻爲正法蓮華。羅什改正爲妙餘依舊經。遠古雙用二說。加以多名謂眞法好法等也。」(T:34 no.1720 p.571c. 116-19) と、古藏造『法華遊意』に「依梵本云薩達摩分陀利修多羅。竺法護翻薩爲正。故云正法花經。晉羅什翻譯爲妙。故云妙法蓮花經。」(T:34 no.1722 p.639a. 118-20) と、聖徳太子 (CE:574:622) 撰 (CE:615) 『法華義疏』第一に「若具存外國音。應言薩達摩分陀利修多羅也。」(T:56 no.2187 p.65a. 117-18) とある。引用文中、下線は筆者による。以下同様。

- (3) 鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』「如來神力品」に「以要言之。如來一切所有之法。如來一切自在神力。如來一切祕要之藏。如來一切甚深之事。皆於此經宣示顯說。」【T9 p.52 脚註②】「要＝密傳」(T9 no.262 p.52a. 117-20)とある。引用文中、太字は筆者による。以下同様。
- (4) 「仁和寺藏本」には「密」とあるが、『妙法蓮華經』「如來神力品」の該當箇所には「要」とある。「如來一切祕密之藏」という用例は、『法華宗要』のほかに慧沼(CE6874)撰『法華玄贊義決』に「六・顯如來四種一切。神力品云。如來一切所有之法。如來一切自在之力。如來一切祕密之藏。如來一切甚深之事。四一切者令知能詮教勝故。」【T34 p.858 脚註⑧】【T34 p.858 脚註⑨】「切+(功德)⑦」(T34 no.1724 p.88a. 119-13)とあり、この一例に限るようである。
- (5) 「仁和寺藏本」の衍字。「大正藏」・「仁和寺藏本」には「示顯示顯」とあるが、『妙法蓮華經』「如來神力品」の該當箇所には「示顯」とあるため、「訓読文」には反映しない。
- (6) 参考までに、智顛說灌頂述『妙法蓮華經文句』卷第十下に「結要有四句。一切法者一切皆佛法也。此結一切皆妙名也。一切力者。通達無礙具八自在。此結妙用也。一切秘藏者。遍一切處皆是實相。此結妙體也。一切深事者。因果是深事。此結妙宗也。皆於此經宣示顯說者。總結一經唯四而已。撮其樞柄而授與之。」(T34 no.1718 p.142a. 125 - p.142b. 12)とあるように、智顛は「結要四句」のそれぞれに「五重玄義」の「妙名・妙用・妙體・妙宗」をあてている。
- (7) 『妙法蓮華經』「譬喻品」に「是乘微妙 清淨第一 於諸世間 爲無有上」(T9 no.262 p.15a. 117-8)とある。
- (8) 「仁和寺藏本」には「出」とあるが、『妙法蓮華經』「譬喻品」の該當箇所には「於」とある。
- (9) 『妙法蓮華經』「方便品」に「是法不可示 言辭相寂滅 諸餘衆生類 無有能得解」(T9 no.262 p.5c. 1125-26)とある。
- (10) 『韓佛全』の誤り。『韓佛全』には「中義」とあるが、『大正藏』・「仁和寺藏本」には「義中」とある。
- (11) 「十有六種」巧妙の四義(開・滅・示・生)、勝妙の四義(宣・示・顯・說)、微妙の四義(円・淨・窮・度)、絶妙の四義(廣大・甚深・離言・絶慮)を合した十六種のこと。
- (12) 【無二】「初述大意」に「无二と言うは、唯だ一大事、佛知見の「開・示・悟・入」に於いて、「无上」、「无異」、「令知」、「令證」の故に。」(NNJ. p.4. 110-11・「訳注」(1) p.51)とあるを参照。
- (13) 『法華遊意』に「今謂蓮花爲通。分院利爲別。」(T34 no.1722 p.642c. 111)とあるように、蓮花の喩を通と別に分けて釈するのは、『法華遊意』からの援用であると考えられる。後掲の註(17)の下線参照。
- (14) 参考までに『妙法蓮華經玄義』卷第七下には「譬如蓮子雖復微小鳥皮之内。具有根・莖・華・葉・鬚・臺衆具頓足。是名蓮子如

是作。」(T.33 no.1716 p.773c. //24) とある。引用文中、中黒は筆者による。以下同様。

(15) 【鬚】花蕊にある黄色いひげのこと。蕊の長さは一寸(約3.3センチ)あまりで、ひげの内側に蓮の実がある。

(16) 【台】花托のこと。花托が肥大して蜂の巣に似た形となり、上面の穴に一個ずつ種子を入れる。

(17) 『法華遊意』に「四者悲花經列四華云。分陀利者謂白蓮華。五者謂法顯傳及天竺諸僧皆云。分陀利者白蓮華也。故知蓮華是通白蓮華是別。」【T.34 p.642 脚註⑦】「白+(色)〇原」【T.34 p.642 脚註⑧】「謂一〇」【T.34 no.1722 p.642c. //21-23】あり、「法華遊意」からの引用であると考えられる。

(18) 後掲の註(20) 参照。

(19) 【蓮花の四種】優鉢羅華 (utpala、青蓮華)、波頭摩華 (padma、赤蓮華)、拘物頭華 (kumuda、黄蓮華)、分陀利華 (puṅdarika、白蓮華) の四種の(一)。(二)

(20) 僧叡 (CE32436) 作『法華經後序』(僧祐撰『出三藏記集』卷第八所収)に「諸華之中蓮華最勝。華而未敷名屈摩羅。敷而將落名迦摩羅。處中盛時名分陀利。未敷喻二道。將落譬泥洹。榮曜獨足以喻斯典。」(T.55 no.2145 p.57b. //22-24) と、『法華遊意』に「又此華凡有三時。未敷之時名屈摩羅。敷而將落名迦摩羅。處中盛時稱分陀利。華即知分陀利是四色中是一色。三時中是一時。以其處中盛時榮曜。備滿足鮮白分明。以喻斯經也。」【T.34 p.642 脚註⑨】「華一〇」【T.34 p.642 脚註⑩】「時+(一)〇」【T.34 p.642 脚註⑪】「備一〇」【T.34 no.1722 p.642c. //24-28】あり。先行する関連章疏中、『法華遊意』に最も近似するため、『法華遊意』からの引用であると考えられる。

(21) 勒那摩提共僧朗等訳『妙法蓮華經論優波提舍』には「十六名妙法蓮華經者。有二種義。何等二種。一者出水義。以不可盡出離小乘泥濁水故。又復有義。如彼蓮華出於泥水喻。諸聲聞得入如來大衆中坐。如諸菩薩坐蓮華上。聞說如來無上智慧清淨境界。得證如來深・密藏故。二華開義。以諸衆生於大乘中其心怯弱不能生信。是故開示諸佛如來淨妙法身令生信心故。」【T.26 p.3 脚註①】「密」蜜

②(元)〇 (T.26 no.1519 p.3a. //10-18) と、『法華遊意』には「三者此花增長滿足出濁泥水。喻佛德無不圓累無不盡出離生死諸濁泥水。頌曰。如來已離三界火宅寂然閑居安處林野。四者此花雖出泥水而不捨泥水。喻佛雖出四流之外不捨三界之中。頌曰。是時長者

在門外立驚人火宅方宜救濟。五者此花微妙鮮潔第一。如佛乘五乘中第一。頌曰。是乘微妙清淨第一於諸世間爲無有上。」【T.34 p.643 脚註⑫】「乘+(於)〇」【T.34 no.1722 p.643b. //19-26】あり、「法華遊意」からの援用であると考えられる。

(22) 『大正藏』・『仁和寺藏本』には「藕」とあり、『韓佛全』には「藕」とあるが、文脈上「藕」の方が正しいため、『訓読文』では「藕」に訂正して採用する。

- (23) 『大正藏』・「仁和寺藏本」には「着」とあるが、「著」の俗字であるため、「訓読文」では「著」に訂正して採用する。
- (24) 【荷】蓮の葉のこと。
- (25) 【藕】蓮根の「ム」。

付録

仁和寺藏本『法華宗要』に基づく『大正藏』所収本の欠字確定一覧

No.	「大正藏」	「原本」	欠字確定	典拠(根拠)	海注	李鍾益
1	p.870c. 118	p.3. 18	者示 ^四 生並	『東文選』(DMS83 p.1v. 19)	四(p.122)	四(p.35)
2	p.870c. 126	p.4. 116	長茲 ^處 ^口 總	『東文選』(DMS83 p.1v. 17)	處(p.123)	處(p.38)
3	p.870c. 126	p.4. 116	茲 ^口 怗 ^口 總入	『東文選』(DMS83 p.1v. 17)	怗(p.123)	怗(p.38)
4	p.870c. 127	p.5. 117	引之 ^以 權羨	『東文選』(DMS83 p.1v. 18)	以(p.124)	以(p.38)
5	p.870c. 128	p.5. 117	權羨 ^羊 車於	『東文選』(DMS83 p.1v. 18)	羊(p.124)	羊(p.38)
6	p.870c. 128	p.5. 117	示有 ^待 之 ^鹿	『東文選』(DMS83 p.1v. 19)	待(p.124)	待 ^々 (p.38)
7	p.870c. 129	p.5. 118	斯 ^遇 ^借 一 ^以	『東文選』(DMS83 p.1v. 110)	借(p.124)	借(p.38)
8	p.871a. 11	p.5. 119	捨 ^假 ^修 以 ^口	『東文選』(DMS83 p.1v. 110)	修(p.124)	脩(p.38)
9	p.871a. 11	p.5. 119	^口 以 ^斥 短短	『東文選』(DMS83 p.1v. 110)	斥(p.124)	斥(p.38)
10	p.871a. 11	p.5. 119	息而 ^修 忘是	『東文選』(DMS83 p.2r. 11)	修(p.124)	脩(p.38)
11	p.871a. 116	p.6. 132	心者 ^爲 ^口 菩	『寶雲經』(T.16 no.658 p.218c. 17)	爲(p.127)	當 ^々 (p.41)
12	p.871a. 116	p.6. 132	者 ^口 一切 ^口 菩薩	『寶雲經』(T.16 no.658 p.218c. 17)	一切(p.127)	爲 ^々 (p.41)
13	p.871a. 121	p.7. 136	佛 ^子 行 ^道 已	『妙法蓮華經』「方便品」(T.9 no.262 p.8b. 126)	行(p.128)	行(p.42)
14	p.871c. 13	p.11. 172	一稱 ^南 無佛	『妙法蓮華經』「方便品」(T.9 no.262 p.9a. 125)	南(p.134)	南(p.49)
15	p.871c. 110	p.12. 179	佛 ^國 ^土 所有	『大薩遮尼乾子所說經』(T.9 no.272 p.326b. 127)	土(p.136)	中(p.50)

16	p.871c, 121	p.13, 188	是故 [□] 不 [□] 違前	「原本」に基づく確定	不 (p.137)	不 (p.51)
17	p.872a, 111	p.16, 1105	如是 [□] 菩提	「原本」に基づく確定	佛 (p.140)	佛 (p.55)
18	p.872b, 16	p.18, 1127	未盡義如是	「原本」に基づく確定	度 (p.143)	度 (p.59)
19	p.872b, 124	p.20, 1143	屬彼 ^地 得運	「原本」に基づく確定	□ (p.146)	亦 (p.63)
20	p.872b, 126	p.20, 1144	智無 ^累 不盡	『法華玄論』(T.34 no.1720 p.390a, 15)	□ (p.146)	有 (p.64)
21	p.873a, 119	p.26, 1191	能示 ^之 用有	『華嚴五教章指事』(T.72 no.2337 p.207a, 16)	之 (p.152)	之 (p.73)
22	p.873a, 123	p.27, 1194	以手指方見	『華嚴五教章指事』(T.72 no.2337 p.207a, 19)	開 (p.152)	開 (p.73)
23	p.873c, 19	p.31, 1231	是義 [□] 何聲	『華嚴五教章指事』(T.72 no.2337 p.208a, 120)	□ (p.158)	如 (p.81)
24	p.874c, 117	p.42, 1314	達磨 ^判 云是	「原本」に基づく確定	論 (p.171)	論 (p.98)
25	p.874c, 124	p.43, 1322	之會 ^純 爲苦	『法華遊意』(T.34 no.1722 p.634c, 119)	純 (p.172)	乃 (p.100)
26	p.875a, 14	p.44, 1329	下劣 ^柔 伏其	『法華遊意』(T.34 no.1722 p.634c, 128)	柔 (p.173)	漸・調 (p.101)
27	p.875a, 15	p.44, 1330	也是 [□] 諸門	「原本」に基づく確定	□ (p.173)	等 (p.101)
28	p.875a, 114	p.45, 1338	佛乘 ^息 處故	『妙法蓮華經』「化城喻品」(T.9 no.262 p.27b, 12)	息 (p.174)	餘 (p.102)
29	p.875b, 118	p.49, 1369	有漏 ^八 無記	『佛地經論』(T.26 no.1530 p.293c, 15)	八 (p.178)	是 (p.107)
30	p.875b, 126	p.50, 1377	說佛 ^義 不遍	文脈による推定	道 (p.179)	道 (p.109)
31	p.875b, 127	p.50, 1377	說二 ^乘 竟斷	「原本」による推定	乘 (p.179)	乘 (p.109)
32	p.875b, 128	p.50, 1379	文傷 ^義 會	文脈による推定	則 (p.179)	義 (p.109)
33	p.875b, 129	p.50, 1379	傷 ^難 會用	文脈による推定	難 (p.179)	則難 (p.109)
34	p.875c, 16	p.51, 1385	淨如是 ^道	「原本」による推定	□ (p.179)	如 (p.111)
35	p.875c, 111	p.51, 1390	言爲 ^息 故	『妙法蓮華經』「化城喻品」(T.9 no.262 p.27b, 12)	止 (p.180)	一 (p.112)
36	p.875c, 112	p.51, 1390	爲 [□] 處 ^故 化	『妙法蓮華經』「化城喻品」(T.9 no.262 p.27b, 12)	息 (p.180)	乘 (p.112)
37	p.875c, 114	p.51, 1392	義語 ^如 直說	「原本」に基づく確定	□ (p.180)	不 (p.112)

38	p.875c, 114	p.52, 1,393	唯有□□無	【妙法蓮華經】「方便品」(T9 no.262 p.8a, 117)	1 (p.180)	1 (p.112)
39	p.875c, 114	p.52, 1,393	有□乘無□	【妙法蓮華經】「方便品」(T9 no.262 p.8a, 117)	乗 (p.180)	乗 (p.112)
40	p.875c, 115	p.52, 1,393	文爲護□定	内容に於る推定	□ (p.180)	非・ (p.112)
41	p.875c, 115	p.52, 1,393	爲□不定□	「原本」に基づく確定	□ (p.180)	決・ (p.112)
42	p.875c, 115	p.52, 1,393	□定性□説	「原本」に基づく確定	□ (p.180)	了・ (p.112)
43	p.875c, 115	p.52, 1,393	定□者説無	「原本」に基づく確定	□ (p.180)	義・ (p.112)

【大正蔵】所収本 (T34 No.1725) の欠字、四三箇所確定にあたっては、①仁和寺蔵本『法華宗要』(「原本」ZNI) のほかにも、②『法華宗要』における経論章疏からの引用文例の調査や、③後代の章疏における『法華宗要』の引用文例を検討した結果に基づいている。確定した欠字(前後二字を含む)は囲み線の太字で示し、表の網かけのセルは先行研究(海住譯註「法華宗要」(大韓佛教曹溪宗韓國傳統書刊行委員會、二〇〇九年)・李鍾益訳「法華經宗要」三元曉全書國譯刊行會編・趙明基監修『國譯元曉聖師全書』卷一(寶蓮閣、一九八七年))の筆者との相違箇所を示す。

付記

仁和寺蔵本『法華宗要』の翻刻及び掲載許可に快く応じて下さった仁和寺の関係者各位、また申請にあたってご尽力頂いた立正大学情報メディアセンター(大崎図書館)の関係者各位に深く感謝申し上げます。なお、『法華宗要』の訓読訳の作成にあたっては、国際仏教学大学院大学の藤井教公教授及び立正大学の三友健谷教授に様々なご教示を頂戴した。記して深く感謝申し上げます。次第である。

キーワード

海東仏教、法華章疏、吉蔵、法華遊意、妙法、蓮花